

バカとテストとS A O

ペトリ皿

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学園長の呼び出しでSAOに参加することになつた明久たちがデスゲームの中
でも変わらずに楽しくゲームクリアを目指していく・・・・。

SAOのキャラも後々登場し、ALO、GGO、アリシゼーションまで
やつていきたいなあと考えています

目 次

僕とみんなとS A O	———						
ぼくとキリトで危機一髪	———						
僕とみんなでギルド結成！	———						
僕の死ぬ気のレベルアップ！	———						
僕の秘密がバレるとき	———						
第一層ボス攻略会議	———						
キリトとL Aとビーターと	———						
涙と落書きと体術修行！	———						
83	65	45	31	21	15	7	1

僕とみんなとS A O

いた

る

「おはようございます、明久君！」

後ろから声をかけられハツとする。彼女は姫路瑞希Fクラスの紅一点といえ

美少女だ。

やつぱり姫路さんはいつみてもかわいいな」と思つていると

「おつ、明久じやねえかお前もババア長によばれたのか？」

この不細工な男は坂本雄二そばには、妻?の霧島さんまでいる
「なぜかおまえにかんにさわることを言われた気がするんだが・・・

まあ、きょうは機嫌がいいからいいか」

(なにつつい、あ男が機嫌がいいだと? 何があつたんだろう?)

「あつそつか、もう式をあげぎやああああああああ足が踏み抜かれたように
イタイイツツ」

どうしてだつづ、結婚したからあんなに機嫌がよかつたんじやないのか!?

「お前、何にも聞いてないのか?」

は? なにを?

「・・・・・今日はS A Oをプレイする」

・・・・・・・・・・・・

「雄二、その話は本当か?」

夏休みが終わつたら試召戦争があるからβテストだけにしようと思つた

あの名作ゲームを

「ババア長がやらせてくれるなんて」

なんだ!? ババア長は何か関係あるのか?

「だろ? なんにせよSAOの開発に手を貸したらしいからな」

なんかババア長のくせにやけに気前がいいな・・・・。

「早く行こう! 雄二、姫路さん、霧島さん! 思い立つたが何とかだ!」

「吉日だバカ! だからβテストの時にもアホな剣士さんって小さい子に言われるんだ」

「・・・・・・・そんなこといわれてないつつ!」

なんて間違いだ! でも言われたのはバカな剣士さんだったとは言えない

「まあ俺もこのことで機嫌がいいってわけだ他にも何人かいつものメンバーを呼んだらしいからな待たせないよう早く行こうぜ」

ほかのみんなも來るのかみんなでやると面白そうだなう1日でもうんと楽し

もう！

「とにかく早く行こうよ！」

・・・・・

学園長に呼ばれた部屋に入るとナーブギアとベッドが複数あります
でに僕たち以外の人が来ていましたみたいだ

「ムツツリーニに美波、秀吉に木下さん工藤さんまで！みんなも呼ばれたんだ！」
「・・・・・コクコク」

「何せ仮想世界じゃからのう姉上も喜んできおつたわい」
「ウチも興味があつたしね！」

木下さんも興味があつたのは驚いたなあでもみんなでやると楽しいしね
「ようやくそろつたかいガキども」

この口の悪いことを言うのは

「あつババア長こんな文明利器のお手伝いご苦労様です妖怪つて
機械いじり得意なんだなくすごいですババア！」

長年生きてると妖怪も知能を持つんだな

「いきなり失礼だね吉井、まあこれからデータ収集に手伝つてもらうよ
次に生かせるようなデータがほしいからね。ほら早くそれをかぶつて寝な
リンクスタートでキヤラネームを登録すれば目の前は仮想世界だよ」

キヤラネームはどうしよう・・・・・

「ねえ、みんなどうする？」

「どうせ1日だけだからな本名でいいだろ」

「それもそうだね、僕もそうするよじやあ行こう！」

「「「「リンク スタート」」」

6 僕とみんなと S A O

こうして僕らは、デスゲームを楽しむことになつた

ぼくとキリトで危機一髪

n
』

『Welcome to sword art online

目の前はβの時と同じはずだった

しかし、目の前にはたくさんの人と上にある真っ赤な空、そして
空に浮かんでいるフードをかぶつて顔のない人？が僕らを見下ろしていた
空には赤く英語が書いてあるが、僕には読めない・・・

不意にフードの人物が話し始めた雄二が要約して説明した内容は、

「お前にわかりやすく説明すると、ここはボスありの試召戦争みたいなもんだ
点数、まあここではHPがなくなると補習室じゃなく、ほんとに死んでしまう」
この時、背筋に冷たいものが走った姫路さんや美波のするお☆し☆お☆き☆
とわまったく違う本当の恐怖、と同時に僕は心底みんなをまもりたいとおもつ

た。

「雄二、話しがある」

くれた

「それで、話つてなんだ？」

「僕は、この世界からみんな誰一人死なさずここから出たい」

今のは前置きだ、これから言う言葉で雄一を説得しないといけない

「そのためには、この層で手に入る最高の武器を手に入れようと思ふんだ」

だ
ろ
う

少し考えて雄二が口を開いた

「だから、それを一人で取に行くってわけか。」

また少し考えるようなそぶりを見している

「明久、本当に帰つてくるんだろうな？もしその自信があるなら行つて来いみんなには俺が言つておく、だが帰つてこなかつたら……」

やつとわかつてくれたようだ、あとは全力でやることをやるだけだ！

そこで、雄二はニヤッと笑みを浮かべて

「もし帰つてこなかつたら、このゲームをクリアしてお前の恥ずかしい

秘密をこのS A O内に広めるからな」

なんて恐ろしいことを考へるんだこのゲームでも生き恥をさらすのか！

「行つて来い、みんなで待つてゐるぞ」

「了解、明日の昼には今日いた場所に戻つてくるよ」

そいつて僕は、走り始めた

・・・・・

クエストをやり始めて森に入った時、すでに9時を回っていた

結構難易度の高い道からやつてきてるのでレベルはあと少しで4だ

そしてこのクエストのクリア条件が動く巨大草の花付のドロップでクリア
だが、またこれが出にくい。（ある条件を満たすと8層でも余裕使える剣も
ある、でもドロップするのは当分後になるだろう）

僕はすでに70体近く狩っているけど花付きは出ない。

「場所を変えるか」

そう呟いて僕は移動を考えた、少し歩くとそこには黒髪のプレイヤーがいた、やっぱり人がいると安心するなあとしみじみ思っていたら、

「そこにいるのは誰だ」

と、黒髪のプレイヤーがこっちを見ていた。これ出ないとまずいだろうな

「こんばんは、僕はアキヒサよろしく！」

黒髪のプレイヤーからは返事が返つてこないしばらくたつて

「俺は、キリトだ」

？キリトだつて、もしかすると……

「君はβテストの時にLAたくさん取つてた…………」

キリトはピクッと反応して聞いた

「君もβテストか？」

うつわめちゃくちや警戒してるじゃないか

「そう、確かβの時は君と同じ層まで上つたはずだよ」

キリトの警戒心も少し薄れてきたようだ

「じゃあ、俺が上った最終層は？」

「第十層じゃないかな？」

キリトはハツと思い出したように

「君、βの時一人だけ張り合つた…………」

フウ～よかつた覚えてくれていたよ

「そう、ここで会つたのも何かの縁だフレンド登録しようよ」

僕がメッセージを飛ばすと重々しくOKを押してくれた

「せつかくだから競争しない？どちらが早く花付きを倒せるか」

キリトは少しだけ笑つて「望むところだ」といつた

けれどまだリップツプしないので待つているとキリトが話しかけてきた

「アキヒサ、君はロクにソードスキルも使わないとβでは聞いたけどそれは本当かい」

「まあほかの人には比べるとかなり少なかつたかな？いろいろあつて体を思い道理に動かせるから、剣の扱いにも結構慣れてたしね」

βテストのときそんなこと言われてたんだ……・・・

「俺が思うに、βテストで最強のプレイヤーは君だつたけどここでは君を抜いて見せる」

そういつてリポップした巨大草に向かつて走つて行つた

もう30分近くたつただろうか、僕たちは巨大草に囲まれていた

「誰だよ、実付き壊したの」横でキリトが舌打ちをしていつた

僕はまず周りを見渡した、数は大体20前後に囲まれているそして

対照的な位置に花付きがいた。

「キリト、ここは背中をお互い預けよう、僕はこっち君はあっちを頼む」

「ああ」そう短く返事してキリトは剣を構えた

横目でキリト見た時の彼の動きはすさまじかった、体重のすべてを乗せソードスキルを使つている大体あと5体くらいだろうか僕も負けられない

「うおおおお」掛け声とともに巨大草の首?を連續で3回ほど切る、後ろから殺気がしたのでソードスキルを使いなぎはらつた。

パリーンと音が響いた後花付きを残した3匹がいつぺんにおそいかかつ

ね

てきた

所を僕がβテストの時に考えた技、「仮ホリゾンタル」を繰り出した。

仮ホリゾンタルとは、 β -テストの時に気づいた現象で初動のモーションを起こさずにソードスキルをつかうこと普通にまねするだけだつたらただの攻撃になるけどシステムアシストに近い速さ（それより速くてもOK）で発生する現象だ。

ゆえに僕はソードスキルをあまり使つてないと噂されたのはこれを多様していたからだろう。

3体もろとも葬つたあと最後の1体花付きに向かつて全体重を乗せた突きでターゲットを撃破した。

後ろから拍手が聞こえるキリトがやつてるはずだチエツ負けちやつたか

「君の勝ちだよ、すごいねキリト」

「でも、アキヒサの剣速にはまつたくお手上げだよ」

そういうつて彼はどことなく雄二を思わせる笑みを浮かべた
さあ剣を取りに行こう、時刻は3時を過ぎていた

た

村に戻つてクエストクリアの音を聞いたときのうれしさは半端じやなかつ

コングラチエレーション、おそらく書かれてあるだろう英語実感しながら
僕たちは、〈アニールブレード〉をゲットした。

「キリトはどうするの？」

「俺はここをしばらくねぐらにするよ」

キリトはこれからも最前線に出てくるはず、

「僕は約束があつて最初の場所に戻らなきやならない、迷宮区かボス攻略
いろんなことがあるけど生きて戻ろう」

僕が手を差し出すとキリトもニッとした笑つて

「もちろん、アキヒサお前も死ぬなよ」

固い握手をしたのはいうまでもないだろう

僕とみんなでギルド結成！

町に着く寸前雄二から「この前別れた場所の最寄りの宿屋へ来い」とメツセージが届いた。町に入るとまだ状況を読み込めない人たちがたくさんいた。

前に雄二と最後に会った場所から宿屋の表示が見えるのでひとまず僕はそこに入つた。

間違つてたらどうしようと思いつつも思い切つてドアを開けると

「「お帰り、アキヒサ！」」

みんな一齊に言つてくれた。もし僕じやなくてほかの人だつたらどうしようと思つた

けど、ここでいうべきではないと頑張つて考えたので本題に入ろう。

「ただいま、みんなこれから何をするのかな？」

「ああ、そのことだがもう決まつてある、ギルドの結成と役割分担だ」
なるほど、ここでしっかりと役割を決めて攻略を有利に進めるということか
雄二はどんなことを考えるんだろう。僕だったら専用の鍛冶屋と商売をしてこ
の世界で

使える金を稼ぐ人がいてくれたらうれしいな

「アキヒサには、いくらか話してなかつた決定事項を伝える。戦闘員は俺、アキ
ヒサ

ムツツリージャなくてコウタ、ヒデヨシにミナミとミズキだ。

それから、会計がショウコ、鍛冶をしてくれるのはユウコで、アイコのほう

は

料理スキルをもうとつてあるからそれで金を稼ぐというわけだ。

そして、ギルドリーダーは俺ということでどうだ？」

確かにいい考えだ、けれど女の子がデスゲームに参加するのは気が引けるなあ
でも、二人ともものすごいやる気だし、余計なことを口出しするのは今はやめと
こう

「わかつたよ、けれどみんな危なくなつたら退く、これだけは絶対守つてね」
「もちろんじゃ」「わかつてるわよ」「わかりました」「…………わかつた」

「了解だ」

配だ

なんせここには現実世界ではありえないものがたくさんある、まああとから説明すればいいか

あ、みんな武器とか買ったのかな?

「ねえみんな、特に戦う人とかは武器とか買ったの鍛冶をするのにも専用のハンマーがいるけど」

ん? 何でみんなそんな目でぼくを見てるのなんかおかしいこといつたかな?

一応

聞いてみよう

「ユウジは何にしたの?」

おや? 珍しくユウジがなんかうろたえているぞ、てゆうかみんなの目線がめちゃくちゃ

気になるんだけど

「すまない、まだなんにも決めていないんだ」

「・・・・右に同じく」

そうだよね、まだんまり時間がたつてないよね。あれ? ユウジが泣いている
ここでは感情表現がオーバーだとは聞いてたけどこれほどとは…
「チクショウ、アキヒサにこんなことを言われるなんて、屈辱だ。あれ、なんか
涙出てる」

失礼な、なにをここまで泣くことはないのに

「…………心中察知する」

「なんだよ! そこまでいう必要はないだろ!!!」

まつたくもつて失礼だ

「早く決めるよ、明日からレベリングするからね!」

そう宣言して僕等は買い物に行つた

「で、コウタ話を聞かせてもらおうか」

なんでこうなったのかを説明すると、コウタことムツツリーにが武器ではなく
この世界のカメラを買ったのだ。

「言い訳があるなら今聞くが?」

ユウジノリノリだな、ムツツリーニ降臨つて感じがするよ

「…………俺は、この世界でも信念を貫く」

「言い訳にしかならないぞコウタ」

さすがにあのムツツリーニといえどこの状況は切り抜けられないだろうなユ

ウジも

かなりお怒りのようだし。

「…………特別に最初の20枚ただにする」

「そうか、なら何とかしよう」

堕ちた、堕ちたよ欲望という名前の誘惑にあのユウジがまけたよ

「おい、アキヒサ何とかしてやれ」

のに

いい機会だショウコちゃんに言いつけるか……

「半分分けてやつてもかまわないぞ」

やつぱり友情つていいよね。

「どのくらいいる?」

結局、コウタはダガーにしたようだ。試召戦争の時も短い武器だつたから丁度

いいんだろうな。

だ

あげく、片手棍にした。みんなようやく決まつたようだね

「明日からが勝負だ、みんなやるぞ！」

ユウジの掛け声にみんな「お～」と掛け声をかけたでもまだユウジの話は終わってないようだ少し間をおいて続ける。

「俺たちは何が何でも生きて帰る。文月学園でまたバカをやるために。俺たちは負けたら

補習室という地獄に送り込まれる試召戦争で勝ち抜いてきた。

その経験は誰にも負けないはずだ！これからはギルドF A連合だ、生きて帰るぞ！」

僕らはまだ100分の1のところにいるけどいつかクリアできるのを待つんではなく

僕らでクリアして現実に帰つてやる

そして、僕はこの世界を早く出ようと決心した

僕の死ぬ気のレベリング！

パリーン。

この世界での死を意味する音が鳴り響いた後、祝福のBGM?が流れた。

「よし、これでみんなノルマ達成だね」

デスゲームが始まつて3日目、みんなのレベルがだいぶ高くなつたところだ、そこで

彼らに提案をしてみた。

「もつと強いとこに挑戦しないか？」

「かつこつけんなバカ！」「・・・・黙れ」「かつこよくないわよ、アキ」

「アハハハ・・・・」「残念じやのう」

「酷い！少しくらい、一人だけでも　おー！とか言ってくれてもいい

じゃないか。なんだよ

コウタの「黙れ」つて少しくらいかっこよく言つても僕の自由だろ！

「…………そういうのは必ずしも自由に言つていいというわけではない」

何で思考が読まれているんだよ！チクショウ！

「アキヒサの理屈にも一理ある。言い方はイラつくがここは従おう」

「「「お～！」」」

「何でユウジの時だけノリがいいの？」

僕の悲痛の叫びがフィールドに響き渡つた、雲一つない晴れやかな空だつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

みんな第一層では有数のハイレベルプレイヤーだつたため戦闘職でない仲間たちもスムーズに新しい拠点に移動することができた。まあちよつとしたこともあつたけど……

移動先は僕が苦戦したあの巨大草の最寄りの村で迷宮区にも近い、いい場所だそれに泊まる場所

としても申し分ない。着いた頃には暗くなり一刻も早く泊まるところを探した。まだ人はそこまで多く

もなく難なく泊まる場所は見つかり女の子達はさつきと寝てしまつた。女の子が寝たあと男子十秀吉

で話をした。とある人がその時調子に乗つて吐いたしょうもない決定事項を変えるために・・・

「えーっと、Fなんとかだつたけ?」

「その場の雰囲気で乗るのではなかつたのう」

「・・・・・・あまりに酷すぎるネーミング」

「まずお前ら黙れ」

ぼくらはニヤニヤ、ユウジは額に青筋を浮かべながら話し合いが始まつた。つい

昨日ユウジが

調子に乗つていつたおかしなギルドネームの改名だ。

「変な名前をつけたのは悪かつたと思つてゐる。けどその時はあれしか浮かばなかつたんだ。

けど今、考えたFとAにちなんでファイナルアドベンチャーはどうだ?」

「ワードがすっごくおもしろそー」

「ダメ、アキヒサじやあお前もなんか言つてみろよ！」

ふつやはり僕にこの質問が来たな！いいだろう、答えてやる！

「FとAをつけてファンタステイツクアンドロイドはどうだ！」

「まずはお前の脳をハントアーティックにしてみようか?」

え始めた

アハハハ、目が怖いよユウジまさかそれで「くだばれええええええええ」ぎやあ

ああああ

危なかつたここが園内じやなかつたらマシで殺されていた！

「さて、二つ目の案は？」

ん？次はムツツリーニかどんなネーミングを言うなかな？

・・・・・ハリーホツ●タ一から「ヌニケツスナイト」

わあ、すつごくカッコいいのが出てきたよこれで決定でいいと思うけどな

「うん、多少強引だが一番ましだな秀吉は何かあるか?」

もちろんないという感じで左右に首を振る。ムツツリーニを超える名前をつける人はここには

もういないだろう。

「もう遅いし寝るか。ベットは女どもに占拠されてるしもし潜り込んだら……」

「死は間逃れない!」

「多分そこまではないが……ここでのなかずっと牢獄で過ごす羽目になるな。今日は遅いから

とりあえず休もう

時間は日付が変わる前で疲れている体は何より休息を欲しているここでは仮想世界なので

床で寝ても風邪をひくことはない少し仮眠を取ろうそう思つて目を閉じた。

不快な振動で僕は目を覚ました。よくよく見るとこいつ寝てるのか?とつっこ

みたくなるなる

ような体勢で僕の顔にユウジの拳があたっていた。

時間は2:28か。ちょうどいい時間だ。小さな声で行つてきますとつぶやいて一人
フィールドに
飛び出した。

フィールドに入つて少し歩くと僕は実付きの巨大草をみつけた。落ち着けと自分に言い聞かせ

剣を握る、目を閉じて大きく深呼吸をすると気持ちが落ち着いてくる。行くぞと心を奮い立たせて

生き残るために絶対タブーの割つてはいけない真紅の実に向かつて剣を振りかざした。

囲まれてどのくらい経つたのだろう用意していた剣（始まりの街で売つていた）は4本あつたのに

残りがいま手に持つてるので最後だ。最悪の場合アニールブレードを使わなければならない。

回復に徹するも武器の交代などでジワリジワリとHPが削られていく。ひときわ嫌

な振動が背中から

伝わってくるHPを見ると残り4割あるかどうか・・・・・・

かなりやばい、けどこのくらいの差【試召戦争】では当たり前だつたじやないか

！そうだ

なんてことはない。集中、集中するんだあの巨大草の弱点の首元に！HPゲージも赤色、絶体絶命

けどこのぎりぎりの戦い嫌いじやない！

「ウラアアアアアアアアアアアア」

頭の中が真っ白になつていくこの感じ懐かしいな壁を壊したとき姫路さ・・・ミズキちゃんを助けようとした時もこんな感じだつたなつと危ない、もう少しで攻撃が当たるこだつた。

ざつと見た感じ数は20前後着実に決めればなんてことない。とにかく近くのやつに攻撃を当てる

その繰り返し、徐々に減つていくHP、だんだん赤くなる目の前、残り5体の時はもう残り1割を切つていた。僕は最後の力を絞り放つた仮ホリゾンタル・アーク。ソードスキルより、疾く、大きくそれだけを考えすべての巨大草にヒットさせるパリー」と破碎音が響き辺りが静かになる。

僕はあたりに何もないことを確認し上を向いて寝転んだ。フツと体が重くなる自分でも何故か

わからないくらい必死になつてたなあ・・・・・・

時刻は5：43分レベルは10僕が予想していたより倒した数は多いみたいだ
「さーて戻ろう・・・・」

これからしばらくこれを続ければみんなを死なせずに済む。そう確信して僕は帰路をたどつた

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

僕らが泊まつて いる宿屋の前に着くと明かりが灯つた。僕は瞬時に隠蔽スキルを使って歩腹前進で

明かりが灯る部屋の前を通過して何事もなかつたように勢いよく階段を駆け下りる音を立ててその部屋に入つた。

「おはよ 「キヤアアアアアアアア」 ギヤアアアア」

誰がいるのか認識する間もなく硬いものが飛んでくるそのあとの確にこめかみに打撃、最後に

頭を捕まれ強く頭を床に叩きつけられる、僕はこの出来事の前後の記憶をなくした

目を覚ますとなんでここで寝て いるのだろうと疑問が生じるがなぜかはよくわからなかつた

ミズキちゃんとアイコが誤つてきたが何故なのかわからない。

僕が部屋についた時にはみんな朝食を食べて いたたくさんの種類があつてなかなか豪勢なもの

がたくさん並んで いる

「あ、 そ うだこれ研いでもらえる？」

ユウコに渡すと不思議がられたけどそこのところは気にせず朝食にありつく。女の子達はもう食事を

終えてお茶を飲んでくつろいでいる食べること10分すべてなくなつて皆が一息ついで僕らは迷宮区へと進んだ目的は宝箱。5fにまで行つたとき宝箱に妙なものが入つていた名前

は
『修羅の書』

このアイテムによつて後々ユウジが拳神、または修羅と呼ばれるようになる

僕の秘密がバレるとき

『修羅の書』

「汝、体で戦う術を極めし時、尚もまた力を求めるか？」

力が欲しいなら奪い取るか掴み取るか？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ゲーム開始から2週間、未だ最初のステージもクリアされない。

うちのメンバーは学園とさほど変わらない。SAOでは浮いているほど明るすぎ

る

ギルドだ。

無論、なんの変化もないとは言い切れない、周りの変化は特にない。

異常があるのは僕自身だ。2週間も「死」と隣り合わせのレベルリングをしてきた

んだから自己責任だよね・・・・・・
周りも僕の変化に気付いて声をかけてくれたけど、僕は「大丈夫」としか返していない

「よし、今日は食材取りに行くぞ！」

僕らのギルドは、多分トップギルド（正式には3層までギルドと言えないけど）でレベルもコルもだいぶ余裕がある。ボス攻略の話もないのにクエストの成功報酬を楽しんでいる

「「お～！」」

「・・・・お～！」

やばい眠い・・・・もうそろそろ倒れてもおかしくないよ。

「?大丈夫かアキヒサ」

「ん?ああ、今日はパンとミルクがいいな」

「お前大丈夫か？」

話も頭に入つてこず、何か話したかも自分ではわからない。覚えているのはガンと床に崩れ落ちた音と誰かが僕をさすつてくれていること

「アキヒサ君、大丈夫ですか？」

ああ、天使の声が聞こえる。

「つコウタ、例のブツを」

「ラジヤー」

「ミズキ、口を開けてもらえるように頼んでくれ」

「あ、はい。アキヒサ君お口を開けてもらえますか？」

・・・・・はい、天使様。僕はあなたの言うことなんでも聞きます。
やつとの思い出口をあけた僕に待っていたものは

「よーし、ミナミとヒヂヨシは足をコウタは手を頼む」

「「イエス！リーダー」」

「3、2、1、投下！」

ドロツとした感触に何とも言えない匂いが口いっぱいに広がるそして
苦すぎず酸っぱすぎずの味わいが・・・・・・

「オ、オロロロロエエエエエエ」

腐った牛乳じゃないか！

「大丈夫か？アキヒサ」

な

ニコニコと満笑の笑みを浮かべたユウジが訪ねてくる。あ、こいつやり上がった
しかし、僕は何をしてたんだ？

「うちの一一番の使い手がこれじゃあ締まらない。仕方ない今日はオフだ」

半覚醒状態から意識がはつきりすること10分気づくとユウジと一緒に
まちを歩いていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

俺、坂本雄二（この世界ではユウジとなっているが）は横にいアキヒサ

のことが気になつて仕方ない。ちらりと見るとだいぶましな顔つきに

なつている

彼を見て、不思議に思うことがいくつかある。

一番気になるのは彼の剣筋だ。ソードスキルは使わない、のにかかわらず俺たちが

与えるダメージをはるかに凌駕している。本人に聞いても、「あ、モンスターが……」

と下手なうそでごまかして、事実はわからない。

報、

しかし、今日はあの情報屋に来てもらつてはいる、この前手に入つたアイテムの情アキヒサの秘密この二つが分かるなら一石二鳥だ

さつきからユウジの目線が気になる、きつと僕の行動を観察しているのだろう。そういう時のやつには裏がある。だけど僕を殺すことはないだろうから

急に立ち止まり、左のドアを勢いよく引く短く「入れ」と僕に言つて先に部屋に入る。

後になつて考えてみると、この出来事で僕らの考えは変わつていったんだと思う

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

僕が部屋に入ると二人の人があつた、一人はユウジもうひとりは・・・

「アルゴ！久しぶり」

「オ、アキ坊力、お久だナ」

「知り合いか？なら話は早い、アルゴまずはといつても俺の推測でしかないが
『体術』らしき名前のスキルがあるか教えてくれ」

その途端、急にアルゴの顔が険しくなる

「何処でその情報を・・・・・？」

「迷宮区で拾つたものにそれっぽいことが書いてあつてな、でその様子だと何か知つてるだろ？」

「じやあ約束シロ、どんなことがあつてもオイラを恨まないってできるか？」

「俺は別に構わない」

「アキボーは？」

「僕も全然OKだよ」

「なら、2層に着いてのお楽しみダ」

「なら、本題に入ろう」

え、今のが本題じやなかつたの？

「あれは、ありえるのか？」

「正直あれはオレツチもめを疑つた、あまりにも速くそして強い、キー坊もかなわないほどにな」

「そうか、結論は出たのか？」

「アレは、システムを誤魔化してるといつたほうが早いナ、ソードスキルとなんの遜色もない速さでヒットしているため、スキルと同じダメージが発生している、と思うゾ」

「・・・フォルス、偽りのソードスキル、か」

おお、カツコイイねそれ、今度から仮からF→と名付けよう

「悪かつたな、俺はもう終わりだ」

コルを取り出しアルゴに渡しながらこつちを見てくる、まるで鬼の形相だ

「アキ坊は何かあるか？」

僕の欲しい情報ね、あ、あいつのことどが気になるな

「キリトは大丈夫？」

「いいお兄さんだナ、キー坊元気に遊び回ってるゾ」

「そう、じゃあよかつた、代金は・・・」

「特別でタダにしてやるヨ、いいものも撮れたりナ」

? いいものが撮れた、なんだろう

「また今度ナ」

彼女はそう言つて部屋からいなくなつた

帰り道、ユウジは話さなかつた、話したくなかったが正解だろうか?

「ごめんユウジ・・・・」

「何か謝ることでもあつたか?」

畜生、馬鹿にしてるな?

「・・・・なぜ、危険を冒してあんなことをした」

まさか・・・バレていたのか。ここは言い逃れはなしだね
「力が欲しかったからさ、みんなを守ることができるのはどう」
すべての問いにホントのことを言おう。

「お前が死んだら元も子もないだろうが！」

彼の言い分は正しい、リーダーとしてメンバーが死ぬことはあつてはならないか

ら

「けど、僕は死ないよ、帰るまで」

そう、死ねない、向こうに帰るまでは絶対に。

「ミズキとミナミどっちが好きなんだ」

「えーとそれは・・・・・つてええええええ！」

「正直になれよ、アキヒサ？どつちがいいんだ？え？」

楽しんでるな、コンチクショウ！

「ユウジはショウコひと「もう1杯いるか？」なんでもないです」

あんなもの飲める気がしない・・・・・・

「さあ、とつと帰ろうぜ、もう遅いし」

「あの、お願いがあるんだけど・・・・・・」

「なんだ？言つてみろ？」

「今日のことはみんなに話さないでくれないか、いつかきつと話すから

みんなに迷惑かけたくないし……」

「…………なら俺にも教えてくれよなアレ、」

「出来るかどうかわからないよ?」

「ハハハ! やつてみなくちやわかんない、だろ。それと無茶するのはほどほどにな?」

「…………うん」

けど、強くならないといけないんだ……。

その言葉が出ようとするのをこらえて彼のあとについていった

第一層ボス攻略会議

「アキヒサ少しいいか？」

「ん? 何」

「明日の攻略会議ミナミは参加させないことにした」

「いきなりどうしたの？こんなに頑張つたんだからみんなで参加しようよ」

「勘なんだが、あいつをボス攻略に参加させたら死んでしまう気がする、

現時点では全体的にトツレベルだが俺達戦闘員のなかじや一番低レベルだ、それに加えて戦いにも慣れてる様子が見当たらない・・・正直ボス攻略には絶対に参加させたくない」

「ユウジの判断なら仕方ないね、でもどうするの？」

一
・
・
・
・
・

卷之三

卷之三

ボス攻略会議当日、僕はユウジに言われた通りミナミを攻略会議に参加させないため巻こうと必死だつた。

ボス攻略3時間前僕はミナミにメールを送つた。

『噴水まで来て欲しい、話があるんだ』

「つよし！これで。k」

「これで一段落ついたさて、どうやつて巻こうかな？」

「で、話つて何よ？」

「どんとこい！」

僕は両手を広げてミナミが抱きついて来るのを待つた。

作戦はこうだ、僕が両手を広げて抱きつかれるのを待つ、抱きついて来た時にハラスメント防止コードが起動するのでレツツ黒鉄宮！つて寸法だ。

「嫌よ」

「なんで？」

なぜだ！僕の作戦に死角はないはずだ！

「だつて・・・・その・・・・明らかに怪しいじゃない」

ううん、困るなこれだけはどうしても譲れないし、でもしばらくはおとなしくしてもらわないと困るし、口で言つても聞いてくれるとは思わないし申し訳ないけど牢獄でおとなしく待つてもらわないと……。そのためには……どうにかしてハラスメントコードを起動させないと

「やあ、こいつ！」

「明らかに不謹慎になつてるわよ…………」

ここまで言つても手を出してくれないなら強制的にハラスメント防止コードを起動させるしかない！

「ミナミ、後ろを向いていてくれない？」

「ん、別にいいけど…………」

む、ハラスメントコードを起動させる

には上だけ脱げばいいのだろうか…………。

「えくつと、一応後ろを向いてみて」

「じゃあ、…………キヤーー！！！」

ハツハツハ、これでミッショソコンプリートだ！

「ねえ、アキ！ ハラスメント警告コードが出てるけど
yesって押していいの!?」

「いやああああああああああ！ やめてええええええええ！」
僕は牢獄になんて行きたくないっ！ けど・・・・・・
これは賭けてみてもいいかもしれない！」

「こつちに、来いやあああああ！」

「イヤアアアアアアアア」

つしゃあー！ これで任務完了だ！

同時にブウォンと顔に不快な振動、そして服のない脇腹に
間を入れず蹴りが飛んでくる、服がなかつたせいかこれがきつかけで
防止コードが発動

横に飛ばされたあと、まるで瞬間移動をしたみたいにミナミのアバターは
黒鉄宮？ に移動した

『このお詫びは2層でするから許してください』

今頃、牢獄にいるミナミにメッセージを送つて罪悪感を振り払う

一応ユウジにも作戦完了と送つて急いで攻略会議に向かう。

そういうえば2層には美味しいケーキがあつたなーと心の隅

で考えながら急いで攻略会議の場に足を運んだ。

・・・・・・・・・・・・・
場所は軽く見てもバスケットボールができる広さで
周りを段差で囲んでいる広場だつた、そこに連なる面々はいかにも
強そうな装備で身を包み何とも言えない貫禄を醸し出して佇んでいる
その一角に装備をつけず短パンにタンクトップ姿で寝ている長身
の男とクリスタルらしきものをやたらといじつている少年、近くに
見ていて和む表情で話す二人の少女が見えた、場違いなのでは？と
僕でも思うほどの雰囲気がにじみ出ている。

あ、この人たち知っている

「君たちアホなの？ 攻略する気あるの？」

「お、帰ってきたことはきちんとやり遂げたってことだな
よくやつた、俺的にはお前が牢獄に行くと思つてたんだが
読みが外れたか・・・・」

こいつは一体どういう気持ちで僕を送り出したんだろう

「ちなみに詫びと謝罪は自分でやれよ」

「（…）まで」いつの心は汚いんだ……

「あの、そんなことよりもうすぐ会議も始まるんですから
さか…ユウジくんはきちんと着替えたほうがいいんじゃないでしょうか」

「それもそうだ。きちんと上着くらい着るさ…

それにお前に下の名前で呼ばれるのはなんか違和感があるな」「仕方ないじやないですかここでは『ユウジ』って名前なんですから」「すまんすまん、仕方ないことを言つてしまつて」「…・…・確かに違和感がある」

「すぐになれるじゃろ」

確かにミズキちゃんは向こうではいつも苗字（僕を除いて）で

読んでいたからな…・…・…

「皆集まつてくれてありがとう！」

これから攻略会議を始めようと思う!!」

「みんな大して話聞かなくていいぞ、ほとんど無駄だからな
敵情視察でもしとけ」

「あ、はい」

「ご丁寧に返事を返すミズキちゃんこんなやつの指示に
わざわざ返事しなくていいのに・・・・・

「はーい、それでははじめさせてもらいます

今日は俺の呼びかけに応じてくれてありがとう

俺はデイアベル。職業は気持ち的に騎士『ナイト』やつてます!』

やつぱりこういうゲームには痛い人はつきものだよね・・・・・

「おーいおっさん痛々しいぞー」

ハハハと豪快に笑うユウジ本当に楽しそうだなう

「それ言つたらダメだろつ!」

思わず突っ込んでしまつたじやないか

さつきの自己紹介で笑っていた人は多かつたけど
ユウジの言葉でヤジが増えてるじやないか

『キヤハハ、いい年してナイトだと?』

『いい顔がもつたいねーぞ』

『その髪海藻みたいでキモいんだよ!』

どうやらここは攻略会議の場所じやないみたいだ

「今日、俺達のパーティーが、

ボスの部屋部屋を見つけた・・・」

何故かとても悲しそうな表情で話を切り出した

『何か言つてみろよ!』

『お前は俺たちニートの気持ちがわからんだろうけどな』
『えつお前ニートなの? 道理で話題が乏しいわけだ・・・ツブ』

『そこ笑うどこじゃないだろ!』

そうか、僕たちは集合場所を間違えたんだ、きっと

「俺たちはボスを倒して次の層へ進んでこのデスゲームをいつかクリアできる事を始まりの街のみんなに伝えなくちゃならない！それが今この場所にいる俺たちの義務なんだ！」

「そうだろうみんな！」

『ワカメの癖にいいこというじゃねえか』

『見直したぜ！兄ちゃん』

『海藻にそんなこと言われたたらやるつきやねーな！』

評価は上がっているように見えないけどここにいるほとんどのプレイヤーが彼をリーダーとして認めている、その証拠にパチパチと拍手が聞こえ始めお兄さんも元気を取り戻したようだ。

「OK、それじゃ早速だけど6人でパーティを組んでくれ」

ここに居るのは僕、ムツ・・・コウタ、ユウジ、ヒデヨシ、ミズキちゃんの5人でキリが悪いけど一応足りるには足りる人数だ
こここのレイドの人数は最大6人そして

最大8つのレイドがボス部屋に入ることができる。

総計48人という人数でボスに挑める。

『あんたもあぶれたのか？』

『あぶれてない、周りがお仲間同士みたいだつたから遠慮しただけ』

「君たち僕と組まない？」

ポケヽとこつちを見てくる少年その隣にフードをかぶった少女？の絶対零度の視線が突き刺さる。

その視線は周りのものを凍てつかせる冷気を帶びながらも今にも崩れそうな虚ろな感じもした。

僕は困っている人を助けたくなる性格だ。ユウジには

「お前はアホだから」とか失礼なことを言われるけどそうなのかも知れない

小学校の時も学園に入つてからも困っている人に

献身的になつて助けていた、自分でも長所か短所かは未だにわからないけれど、今ほどこの性格をいらないと思つたことはない

少女？の目は明らかに疑惑と拒絶の色が濃くなつていくばかりだ

「ちよい待つてくれんか」

気付くと後ろにトゲトゲ頭の男が立っていて結構な高さの階段を3回ほど跳躍してからデイアベルの横に立つ。

ちなみに彼は現時点ではかなりのハイレベルプレイヤーに属するステータスだと思う。

「ワイは『キバオウ』つてもんや、ボスとケリ付ける前に一つ言いたいことがある。こんなに今まで死んでいった人達に謝らんといかん奴がおるはずや！」

「キバオウさん君のいう奴らはβスターのことかい？」

「もちろんや！ ベータ上がりのクソどもはデスゲームになつた瞬間初心者見捨てて消えおつた、奴らはいい狩場やらうまいクエストを独り占めして、自らだけどんどん強なつてその後もずーっと知らんふりや

こんなにもおるはずやでベータ上がりの奴が！ そいつらに土下座させて溜め込んだもの全てをはきだしてもらわなパートィーメンバーとして命は預けられんし預かれん！」

目の前の少年はキバオウの言葉を受け止めどうしようか必死で

悩んでいる、僕も β 上がりだけどバレなければいいと思つていたので
そんなことは考えたことがなかつた

「おいおい、キバオウさんとやら少しいいか？」

近くにいる赤髪の男もといユウジはふてぶてしそうにしかも
当然かのように発言した

「なんや？ ワレ」

「 β 上がりのクソどもが狩場を独占しただけのうまいクエを一人占めした
だの土下座して溜め込んだものはきだしてもらわないと命を預かれんし
預かれん？ はつふざけんなよ、もしかしたらその β 上がりのくそどもが
このゲームをクリアしてくれるかもしれない、自分ひとりの命で精一杯
でいざという時には助ける実行力もないくせに綺麗事抜かすんじやねえ！

死ぬのが怖かつたら始まりの町で引きこもつて β 上がりがこのゲームを
クリアするのをおとなしく待つとけ！ ここはいつ死んでも未練がない奴らが
集まる戦場のど真ん中だ、死ぬのが怖ければ今のうちにこの場所から出て行け

なんでもかんでも β のやつらに責任転換するのはやめろ！ ここで生き残るため
には仕方ないことだ。そして死んだ奴らの半数がベータの人たちでもある、 β の時の
情報で退く時を間違え死んでいった奴らがほとんどだ。

それに比べて臆病なお前たちは現時点であまり死んでない、お前たちの方が有利な位置にいるのを考えたことはないのか？以上だ
ザワザワ、パチパチなどいろいろな音が混ざる中

ふん、といったかんじで腰を落とした

「なんやワレ！貴様も♂テスターなんやろ」

「おやおや、そんなこと言つていたら♂のやつに失礼だぞ
この武器みりやわかるだろ？」

確かにそうだと誰かがつぶやき笑い声まで聞こえる

ユウジの熱弁は人々を説き伏せ同調させ雰囲気まで変える
素晴らしいものだった

「俺も発言いいか？」

本当にぬうつつて感じのおつきい外国人っぽい人が

キバオウのまえに立ちはだかる、キバオウは若干押され氣味で
「な、なんや？」と答えた

「俺の名はエギルがあんたの言いたいことはよくわかる
ベータスターが面倒を見なかつたからビギナーがたくさん死んだ。
その責任を取つて謝罪、賠償をしろ。だろ？」

「そ、そや！」

「道具屋で無料配布してあるガイドブックはみんな知っているだろう？」

配布しているのはベータテストしかありえないと考えたことはないのか？

情報は誰にでも手に入れられた、それでもたくさんのプレイヤーが死んだ。それを踏まえて俺たちはどうボスに挑むべきかそれがこの場で論議されると思つたんだがな」

「いいねえ、あんた！ ブラボーダ」

よこのユウジが大声で褒め拍手をすると周りも応え
キバオウはいかにも面白くなさそうに手近な段差に腰掛けた

「ボスの情報だがさつき情報が入ってきたボスの名前は
イルファング・ザ・コボルトロード……」

『おい、あのキモ海藻がまた何か言つてるぞ?』

『俺はエギルさんがリーダーでもいいんだけどな・・・』

『いや、ユウジさんも捨てられねーぜ』

彼の高評価はユウジたちに持つて行かれたようだ

・・・・・は朝10時に出発する、解散!』

あつという間に会議も終わつて僕は再び彼らのとこに行つた

「それで、パーテイーの話はどうかな?」

「俺は歓迎する。あなたがいるとより安全だし、でも・・・・

チラリ、横のメンバーに目で訴えるように問いかけると
ふんと返事して

「あなたが信じているならそれでいいわよ」

いかにも渋々返事した彼女?に心の中でお礼を
言う。後で機嫌を取ろう!

「おいアキヒサそいつらとパーテイー組むならミズキ

を頼む、俺はエギルたちと組むからミズキを守つてやつてくれ』

ユウジの隣に本当にあの巨漢がいて時々「クレイジーな兄ちゃんあんた最高だ」と言つて拳を突き合わせていた。

向こうにはミズキちゃん含めて6人丁度でこつちに来る必要はないと思うんだけど……

「二度も言わすなミズキを頼んだぞ！」

「OK命にかえても守るよ」

キリトからパーティー申請が来たので承諾すると左上に『k i r i t o』『a s u n a』『m i z u k i』の文字が現れた

「よろしくね！キリト、アスナちゃん」

「なんで名前を知ってるの？」

なぜ？といった目で僕を見てくる少女に僕は答えた

「右上に書いてあるんだよ、見てごらん」

「キリト、アキヒサ、ミズキこれがあなたたちの名前？」

「そうだよ、よろしくね！」

「よろしくお願ひします、キリトくん、アスナちゃん」

「いえ、こちらこそ」

「…………お願いします」

律儀に挨拶を返す二人、中学生くらいなのかな?

それはそうとパーテイメンバーなんだし僕たちのホームに招待しようかな

「君たち暇なら僕らのホームに来ない? そこそ広い
し料理も美味しいし」

「それにベッドも大きいのがありますしお風呂も
設備されますしね」

「…………今なんて?」

やけに食いついてくるなあアスナちゃん、キリトの方もしてやられた
つて表情だし

「アキヒサたちがあそこをとつていたのか。」

「ごめんごめん、あまりにもいいところでさ」

横にいるミズキちゃんがもアスナちゃんに説明を終えたらしく

「・・・・・ぜひお願ひします」とか楽しそうな笑い声まで聞こえる

「ということでユウジもちろんいいよね」

「もちろんだ、ただ1ついうことがある。キリトとやら

お前が寝るとこ」「床」だぞ」

「なんでだよ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

時刻は6時、僕らはホームに戻つて夕食を食べていた
あんな感じだつたアスナちゃんも時折笑顔が見え始めた
「これとても美味しいです」

「ありがとうございます、どんどん食べてね☆」

「・・・・・ユウジ、お風呂」

「やめろ!!俺はまだ牢獄へは行きたくない！」

「ふああ（これもこれも美味しいですアイコちゃん）

「ミズキそんなに食べてるからお腹が出るのよ」

「ふえつ！ そんな冗談やめてください 酷いですユウコちゃん」

「（）めんごめん」

「・・・・・・ごふつ（ビツクンビツクン）」

「コウタどうしたのじや！ まさか・・・・」

「あ！ 私の作つたクッキー美味しかつたですか？」

「・・・・・・（グツ）☆」

馬鹿な！ あの殺戮兵器がここでも再現されるなんて
「スゲー賑やかだな」

不意にキリトがつぶやく、まだキバオウの言つたこと気にしているのか
ユウジの熱弁ですっかり忘れていたけど彼の主張は間違つていない

「君はどう思つているかわからないけどそんなに
心配することはない、その時は僕らのギルドに入ればいいさ！
これでも食べて元気出して！」

さあ、キリトくんミズキちゃんクッキーで悶絶しろ！

「すまない・・・・・・がはツ」

俺ことキリトはそのあと記憶がない・・・・

64 第一層ボス攻略会議

キリトとL.A.とビーターと

バス攻略日

午前6時、僕たち+キリト＆アスナちゃんは早々万全の準備をしていた。

まず、おそらくだけど最高の鍛冶スキルを誇るユウコに僕は、できる限りの鉱石と今現在手に入る最高の素材で剣を作つてもらうことにした。

ユウコの鍛冶スキルは（特に僕とユウジが）手に入つた素材でとにかく武器を作らせ、全体の戦力アップと稼ぎも兼ねて作つてもらつたので大体200～300程度はくだらないだろうとユウジは推測している。

もちろん、キリトに「慣れない剣で大丈夫か？」と心配されたけど僕好みの丈夫で軽い剣になるように素材を揃えたから多分大丈夫だと思うとは答えたけど···

僕たち4人の役目はバスの取り巻きモンスターの相手をすること

キリトと僕は一度やっているから多分大丈夫、アスナちゃんはわからないけどミズキちゃんは持ち前の頭で攻撃パターンをすべて把握しているから死にはしないと思っている

アスナちゃんの方もキリトから太鼓判をもらつていて
からそれを信じたい・・・・・

「お〜い、みんな朝ご飯ですよー」

宿屋の一階から元気のいい声が聞こえて来たので

とりあえず考えるのをやめにした、ボス攻略は何が起ころかわからぬ
ことを十分理解していたから

・・・・・これが終わつたらミナミを迎えに行くんだつたな

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

出発前、30分僕の剣を持ってきてくれたユウコは
珍しく、学園でも見たことのない表情で僕に剣を

渡してくれた。

それからみんなを見渡して「死なないで」の一言を言い残し中に戻つていった

横からぬつと出てきたユウジは

「もし危なくなつたら、自分のことを最優先に考えろ」

と言つたあと焦点が合つてない目でフラフラン前に進み始めた
昨夜何があつたんだろう？

フィールドに入つたあとも特に剣を抜く事態は訪れないまま
キリトに「確認していくほうがいいぞ」と言われて確認する

後ろではキヤツキヤ、ウフフの雰囲気で仲良くおしゃべりの
声がする、とりあえず仲良くなつて良かつたなあ

剣の銘は『Sword of the iron meteorite』

「えうつと、ソードオブ・ザ・いろん・めておりて？」
「アキヒサ君少し見してもらつてもいいですか？」
「ん？別にいいけど・・・・・・」

僕には最初の単語だけで精一杯だ

「これは区切りをつけるとソード・オブ・ザ・
アイアン・ミデオライトです、訳は」

「隕鉄の剣ですよね」

「流石です！アスナちゃん」

ううう、横のキリトの目線がものすごく痛い！

「…………この人私より年上？」

「こんなことを言われるのは実に5日ぶりだ

「そんなことを言つたらいけません！ソードオブザ

まで読めたことを褒めるべきです！」

うん、それ全然フォローになつてないよね…………

「アキヒサ、今度俺が教えてやろうか？」

中学生？今までこんなことを言われるとは思わなかつた

「キリトくん君には大人の保健体育を「アキヒサ君？」

なんでもないです」

そのあとはスイッチのタイミングやフォーメーションを確認しているうちにバス部屋に到着した

青い髪のお兄さんは流石に長々話すつもりはなかつたようで最後に「行くぞ」とだけ言い第一層のバス攻略は始まつた

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

バスはコボルトロード、周りに取り巻き4匹

HPゲージが一本減ることにリポップし最後の一本になるとステータスが少し上がつてリポップするおまけ付きだ

一匹あたり4～6人で対応しているためバスには半分の戦力が注ぎ込まれている、一ヶ月という期間のせいかみんなの平均レベルも高くよっぽどのことがない限り半壊はしないだろう

気をつけるといえば最後のゲージが3割を下回ると曲刀スキルに切り替えることくらいのはずだ

ボスの方も順調だし攻略は成功するだろう

本戦に参加できないのが残念だけど立場上仕方ないからな・・・
とりあえず目の前にいる敵に集中しよう！

「キリト、スイッチ！」

「おう！」

スラントで剣を跳ね上げると横に下がる僕はすかさず

『リニア』を叩き込む（ただの真似事だが）

剣の性能と突きの速さでシステムを騙し、ソードスキル
と同じダメージを与えることの出来る僕の『システム外スキル』だ。

3匹目のコボルドを刀の鎧に変えてみんなとハイタッチを交わす
「とつてもかつこよかつたですよアキヒサ君！」

「ありがとうミズキちゃん」

「G J」

「ああ、君もね」

「もうすぐ4匹目が出てくるわよ」

アスナちゃんの忠告を受けてボスを見るとHPゲージも最後の

一本に入りかけてリポップする直前の状況だ

特に危ないわけでもない、かといってこのまま終わりそうもない
変な感じが・・・・・・

「ミズキちゃん、アスナちゃんそいつを片付けてて！」

キリト少し話がある！』

「一体何だとでも言いたげに

「一体何だ？」

ついには言つたが気にせず何かが違うことを説明する

ボス攻略もあと少し、もうすぐおしまいなんだけど何かが違うこと

もうすぐ最後のバーが3割を切るとき、ロードの腰についている

あるものに目が行く、本来なら曲線を描いているはずのものが

鈍く光を放ち真っ直ぐ伸びている

「あれって、刀じゃない？」

「そうじやないといいんだけどな・・・

おなじみだつたはずのシャリンというサウンドは聞こえず代わりに

10層で、いや、ベータテストで最も厄介だったスキルの武器を抜くジヤリンと重そうな音が響いた

「やつぱりかーー！」

『下がれ、俺が出る』

とデイアベル、本来ならパーティー全体で攻撃するのが普通なはずまさかLAを狙つて！

「ダメだ！ 全力で後ろに飛べ！」

キリトが叫ぶ、ほとんどのやつが何言つてるんだ？ とか思つていても確かにキリトの言葉は間違つていない、後ろに飛ばないとスキルに当たつてしまふから彼の叫びは100点満点の回答だ

お生憎デイアベルはLAをとることに一生懸命だし聞こえていても「俺が後ろに下がつた瞬間お前がLA取りに行くんだろう」と思つていてるだろうこの時、こんなことを考へれる脳みそじやないけど勘で危ないと

判断した僕はソードスキルを発動させて一気に飛び出した

「間に合え———」

この距離ならソードスキルを使ってギリギリ間に合うかもしない
その楽観的な考えはとてもとても甘かつたと剣を
振り下ろす前に気づいた

ボスの動きは予想よりはやく僕がスキルを立ち上げた時には
既にディアベルに攻撃が当たり飛んでいくところを見ることしか
できなかつた

飛ばされ必殺の一撃をもらつたディアベルにポーションを
渡して尋ねる

「どうしてあんな無茶をはやく飲んで!」

ディアベルはそれを制して一言

「・・・・・頼む、ボスを・・・・倒してくれ
みんなの・・・ためには」

彼の体は破碎音を響かせ消えていった

彼もベータテスターだつたのだろう、これからも
リーダーとして皆を引っ張っていく人材を失つたことよりも
自分の目の前で人が死んでいつたことに言い表せない
悲しみや怒りを感じる

彼のことはよく知らないけど人の命の重さ、
儚さを彼に教わった。そして本当にデスゲームなんだ
本当の意味で分かった気がした。

彼を死なせてしまつた自分への怒りと、もしかしたら
現実世界で目を覚ましてるのではないかという僅かな希望を
剣に込めただひたすら斬りまくる

目の前で人が死んでしまつたことで判断力は鈍り、

剣筋は単調になり、ただシステム任せのソードスキルで動かした
攻撃はモンスター程度の人工脳にも軽くあしらわれて いる状態だ
ついには剣はパリイされロードは追撃のソードスキル
を発動させていつ振り下ろされてくるかわからない状況にまで

追い詰められた

剣で攻撃を防ごうとするが動かず、体を捻つて回避しようにも間に合わない、ここが墓場かなんて思っている時に視界の隅に2本の輝跡が刀にぶつかる

「しつかりしろ！アキヒサ」

振り下ろされてくる剣をパリイしたあとに巨漢の二人がかけよつて来てくれた

「ありがとう、ユウジそれと・・・・・」

この巨漢な名前はえりつとアメリカ人っぽいし

「サンキューボブ」

「俺はボブじゃねえ！自己紹介は後だはやく回復をしろ！」

僕はボブ（仮）に感謝して酸っぱいような苦いような液体を飲み干してHPの回復を待つ。

とは言つても刀スキルを知らないみんなは対応しきれず防戦一方で戦況は動かない。

「アキヒサ俺もやるぜ」

「ああ、頼む！」

「私もやります！」

「私も」

一旦デイアベルを死なせてしまつたことを切り離す

ここで死んでも彼に合わせる顔がないそれにデイアベルは最期に誰も死なせないでくれと僕に語りかけてくれたから

ビーター時代の最高の好敵手にして最強のプレイヤー

光速の速さでスキルを繰り出す少女

長いといえば長く、短いと思えば短い付き合いの誰よりも

頑張っている女の子

「行くぞ！」

今度は何も返さず僕とキリトを前衛に飛び出す

僕が剣を弾きキリトが体勢を崩させる一撃を放ち
後ろの二人が重い一撃を重ねる

あと一撃のどこまで追い込んだとき

最後の悪あがきのつもりだろうか、大きく後ろに跳び
デイアベルを葬つたスキルを発動しようとしていた
もう迷いはない。ただとびきり疾い最高の一撃を
当てることに集中する

「みんな！ 後は任せた」

片手剣突進技『ソニツクリープ』、スキルを発動させ突進しながら

振り下ろしてくる刀に向かつて、ロードに向かつて思いつきり振り下ろす

願わくば、ロードに当たつてLAを取れますようにと

なんとかスキルの発動を防ぎボスと一緒にしたに叩きつけられる

「キリト、ミズキちゃん、アスナちゃん任せた！」

結局いいところは持つて行かれそうだけど死人が

増えなかつたことだけでもよしとしよう

数秒後、眩しいほどの光を出して第一層のフロア
バスは爆散した

『Congratulations』の表示が出るとみんな
歓声を上げ攻略がうまくいったことに歓声をあげる

僕もみんなとハイタッチしてさつきの外国人に挨拶
をしようとしたとき、たつた一言でこれほどまでに空気が
重くなるとは想像もしなかつた

「なんでやー・なんでデイアベルはんを見殺しにしたんや！」

キリトの周りで喜んでいた人たちもその言葉を聞きいて

「確かに」「そういえば」などと疑惑の声が上がつている

「そーやないか！自分らはバスが使う技しどつたやないか！

その情報を伝えていればデイアベルはんは死なずに済んだんや！」

それは、僕はベータテストで10層まで行つたから

ことになりそうなのでここは黙つておく。

実際に刀スキルを知つていたのは僕とキリトだけなのだから

『きっとあいつ元ベータスターだ知つていて隠してたんだ！他にもいるんだろ、出てこいよ！』

それがきっかけでほかの人たちも「お前違うだろうな」

「お前こそベータスターじゃないのか」などとちらほら聞こえてくる

このままじゃ一番まずいパターンだ。僕やキリトは

どうなつてもいいとして、ほかのベータスターにも矛先が
向けられるのだけは避けたい。

最悪の場合でも怒りの矛先は僕らに向けないといけない

幸運か不幸かキリトも同じ考えだったようで「うまく合わせてくれよ」と苦笑しながら語りかけてきた

僕等の前では色々な親切な人たちが抗議しているが何ふり構わず
キリトに合わせる。この方法が最善の行動になるから

「フハハハハアツハツハツハ」「キヤツハツハツハギヤツハツハツハ

「俺をあんな素人連中と一緒にしないでくれよ」

「なんやて!? それになんやそこのアホズラ！ 気色い

笑い方すんなや！」

「だつてキリト」

「今のは明らかにお前だろ・・・・・・・・」

失礼な！アホズラと言つたらユウジかキリトしかいないじやないか
「とにかく、あんな素人と一緒にしないでもらいたい

あいつらはソードスキルも使えない、レベリングのやり方も知らない
今ここにいるお前らの方がまだマシだよ』

「でも俺らはあんな奴らとは違う俺たちは2人で誰も到達
できなかつた層まで登つた。ボスのスキルを知つていたのも
同じスキルを使うモンスターとさんざん戦つたからだ』
「他にも情報やうまいクエ、なんでも知つてるぜ

問題にならないくらいにね』

今のはハッタリだ。僕はほとんど覚えていないから

この状況ではほとんど信じてくれるだろうけど・・・・・

「そんなんベータテスト哪儿かチーターやチーター！」

『ビーターにチーター、だからビーターだ』

『そうだビーターだ！ビーター！』

「ビーター、いいなそれ」

「そうさ、ぼくたちはビーターだ。ほかの雑魚と一緒にするなよ」

キリトは素早く指でタップしてバサリと長いロングコートを翻す、僕も負けじとの前ドロップしたばかりのいかにも植物で出来ていそうなカラフルな少し長めのコートを翻し、おまけに剣を肩に担いであとを追う

「待つて」

キリトにアスナちゃんが話しかける、ついでに僕にも馬鹿面ででかいだけの赤髪の男が話しかけてきあがつた

「つれねえなアキヒサ、らしくないぞ！」

好きでやつたことじゃないのにいちいち

痛いとこをついてくるなあ

「シ、後ですぐ戻ってくるからこのままかつこよく行かせてよ！」

「まあいい、ミナミのお迎えはショウコたちが今やっていると思うから上で落ち合おうぜ」

「うん、上で待つとくよ。ミナミのことはよろしく」

先に上に行つたキリトのあとを追いながら第二層へと
続く階段を上つていった

涙と落書きと体術修行！

ミナミ side

ボス攻略当日、ウチは誰もいない暗がりの中でひとりうずくまつていつた。

事の発端はほんの2・3時間前に起きたある出来事だ
多分牢獄になるんだろうけどここに送りつけていつた
バカの顔を思い出す。

彼は服を脱ぎ抱きついて来い！と宣言したもののウチは
目の前に出てきたハラスマント防止コードのことを訪ねた
押すななどと言つてくる割にはウチが殴つたりしただけで
ここに送りつけてきた。そのあと『このお詫びは2層でするから
許してください』とメツセージを飛ばしてきたときは本気でどう
いたぶろうか真剣に悩んだほどだ

まずは爪、そして指の骨（多分はがすことも折ることも

できないだろうけど）そうやつて考えていくと少し落ち着いてなんとか正気に戻ることが出来た。

ここに来てからおよそ1時間経った頃にもう1通メッセージが飛んできた『すまないが今回の攻略は俺とアキヒサの独断により参加をさせないことになつた。俺は言つて聞いてくれるだろうと言つたんだがアキヒサが「日頃の恨みを込めて彼女には牢獄でおとなしくしていてもらいたい。そしてそこで自分の愚かさに気付き悔い改め何が自分にあつているのかよく考えろ！貴様は僕が牢獄に送つてやる』って口走つたあとどつかに行つたからこのメッセージを受け取つているのは牢獄の中かもしれないな

アキヒサのメッセージのことをよく考えてショウコたちが迎えに来るのを待つてくれ

b y ユウジ』

「自分の愚かさに気付き悔い改め何が自分にあつているのかよく考えろ！」か、絶対に坂元、いやユウジの

言葉ね・・・・・

アキがそんな難しいこと言えると思つてているの？・・・・・
ウチにできること、か。

アキはバカだけどゲームに関しては天才的だし、変に運動神経がいいから
この手のゲームは得意かも、ユウジの方は喧嘩とかで実戦の経験
はすごくしている、はず・・・・・・・

それからコウタは無駄に速く動けるし、ヒデヨシは以心伝心？

みたいなやつでアキとユウジが合図をしなくてもスイッチとかいう攻撃
をスマートに行うことができる。

ミズキに至つては運動神経が悪いのにモンスターの動きを全部
頭に詰め込んでいるから隙が出来た時に思い切り切り込む事が最近
できるようになつてきていたわよね・・・・・

ウチにできること ウチにできること ウチにできること
ウチにできること ウチにできること ウチにできること
・・・・・・・・ 何があるの？

試験戦争では逃げたり点数の低い相手を倒すだけ。

本気で戦つたことといえば美春の時くらい、Aクラス戦ではあつさりやられてしまつた。

【この世界では、一瞬の迷いが命取りになる。ゲームオーバー（死ぬこと）を恐れて攻撃ができなかつたりすると本当に死んでしまう・・・・ま、どうするかは各々で考えな】

前に、ユウジがそう言つていた。

正直、ウチはあまり戦いたくはない。戦おうと決めたのは
ミズキが戦いたいと言つたから・・・

まさか、ミズキが戦いたいとは思わなかつた。いつもの
ミズキは、基本的に穏やかでモンスターを殺すようなゲームは
やりたがらない女の子だつたのに！

なんで、こんなに怖いゲームの戦闘に参加しようと思つたの！
死ぬのよ！死んでしまうのよ！なんで？なんでよ！

誰かの隣にいるために戦いたい気持ちと、死ぬ可能性があるなら戦いたくないと思う気持ちとの葛藤の中、身体と心を照らす一筋の光が暗い牢獄の中に差し込んだ

アキヒサ side

同刻、第一層攻略45分後

第二層、古びた店。β時にプレイした事のある人ならば一度は耳にしたことのあるだらう例の店だ。

この店は、β時代、偶然と気まぐれで見つけることができた名店だ。僕もついさつきミナミとのやり取りがなければ存分に楽しんでいたのに・・・・

よし、現状を把握しよう。古びた店の中、人気のない店内の中心に位置する六人くらい座ることのできる円状の机に僕とユウジが並んで座っている。そして残りの4席にユウジの方から霧島さん、工藤さん、美波、そして木下さんの順に座っている。

秀吉とムツツリーニは店の端っこで他人のフリを決め込んでいる。

すでに、5分の沈黙。

「…………」

「…………」

「…………」

「…………俺は関係ないぞ」

「おおおおいっ！貴様裏切ったな」

確かに実行したのは僕だけどユウジには

十割ほどの責任があつてもおかしくはないだろう。

「…………ねえ？計画を立てたのは
ユウジでしょ？」

「…………いや、俺は違うぞ」

「…………ユウジデシヨ？」

「・・・・・・・・・・」

「さすがショウコちゃん！話がわかるね！」

「・・・・・ユウジ、yesと取るわよ。

それとアキヒサ静かに」

「！はいっ」

気まずい、何か話題を変えないと。

そういえば、ここは一層よりもご飯も美味しくて
特にケーキが絶品なんだ！

「とりあえず、ご飯を食べよう！」
ケーキが
とても美味しいんだって！」

「ええ、知ってるわ」

ミナミ、アイコちゃん、ショウコちゃん、ユウコちゃんが
待つてましたとばかりに言葉を放つ。

「でも、こここのケーキってとっても高いんだよね！」

おおーっとアイコちゃん、君は何を話しているのかな？

「それは、みんなで集めたお金で食べようよ」

これは、もしかして、払わせられるパターンじゃないのか？

“雄二！どうする？”

“どうするもこうも、俺は知らん！”

“おいっ！せこいぞ、せめて貴様も払え”

“そうはいくか！”

「みんな、たらふく食つていいぞ！今日は俺の隣のやつの奢りだ」

「[[[[[「イエーーーイ！」]]]]]

・・・・・

俺の隣のやつの奢りだ？

「待つて！ユウジも払うよね？」

してやつたりとばかりの笑顔でこつちを振り向く。

「本人も喜んでいるからな！」

このクソゴリラ！

「…………ユウジ貴方も」

「ショウコ何を言つて いるんだ? アキヒサが快く
払つてくれるて 言つて いるのに」

「…………ユウジとアキヒサが お金をたくさん
持つて いるのは 確認済み」

待てよ、僕らは そんなこと 見せないし 他人には
見ることのできない ように 設定して いる。

「…………アナタ達、夜ずっと 戰つて いるでしょ?」

「やつて いるわけないよ (あるか)」

「…………この前夕方から 昼まで
ずっと 寝て たでしょ?」

「ハハハ、寝るの は自由だろ?」

「そうだよ！僕だつてたくさん寝たい時だつてあるんだよ」

「…………その時に見た」

「俺らは他人に見られないようにしているんだぞ？」
同じく僕もユウジに言われて他人に見られないように設定してある。

「…………夫のことはきちんと見ないと」

「…………まさか！俺の手を使つて可視モードにしたつてことか！」

「そうなら、もしや僕も！」

「ミナミー・ミズキちゃん！まさか！」

二コつと微笑みを浮かべる二人

「…………おとなしく、言われるようにします。」

ダメだ、僕の頭脳では「まかす策が思いつかない隣のユウジも頭をうなだれているどうやら成すすべが

無いようだ。

そこから後は僕とユウジがパンとスープだけで食事を済ませ、「ここつていくら食べても太らないんだよね」とアイコちゃんの一言で女性陣の食欲に火がつき、かなり食べるユウジも唚然「マジか」と呟いていた。

バカでかく、バカ高いケーキを6つも（そのうち5つ女性陣が）食べたせいで僕らの有り金は文字通りなくなつた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「飯も食つたし、アルゴからの情報もある。

さて、行くか！」

「じゃー…よろしくねヒデヨシ」

アルゴ曰く『体術』スキルはユウジの判断で比較的戦闘向きの僕、ユウジ、ムツ…コウタが習得することになつた。

残りのヒデヨシ、ミナミ、ミズキちゃんはHPゲージが
黄色になつたら必ず逃げることを約束し僕らとは別行動をとつた。
体術修行の場所はフロアの端で言い表すなら

山小屋といったところだ。

どうやら、牧場のようなフロワの割に奥に進むと
茂みになるようだ。

「邪魔するぜ」

「…………失礼」

あ、周りの状況を気にしすぎて入るのが遅れた
みたいだ。

「おじやましまー」「お、おいつじじい何しやがる！」

「…………屈辱」

よし、帰ろう。

「ごめん！先に帰るよ」

「おいつこれ消えねえじやねえか！アキヒサ

帰つたら覚悟しろよ！」

「…………消えない」

ゴメンだけど僕には君たちと同じ場所に行く
覚悟は出来てないんだ……

「see you again……君たちのことは
3秒だけ覚えておくよ」

3

僕走ろうとする

2

後ろから茂みをかき分ける音がする

1

両肩を掴まれる

「ひどいじゃないか、アキヒサ君？」

「…………まだ覚えているよな？」

「嫌だなあ、僕が友人を裏切つてまで逃げようと
するわけないないじや……やめて！僕をあの空間

に連れて行かないで!」

1分後僕も彼らと同じようにヒゲを書かれた

「我が門下生になつたからには奥にある岩を割るまで
武術の習得はないと思え。途中で逃げ出したものは門下生の
印を一生背負つて生きていくことになる。以上だ」

「なんでこんな目に……」

「ユウジはナ#トみたいでいいじゃないか。
コウタも少ししか書かれていないんだから。
ところで僕はどんな感じ?」

「マリ#だな」

「・・・・・マ#オ」

「ちよつとまでえい!なんでみんな3本のヒゲなのに
僕だけ普通のヒゲなんだよ!」

あのジジイ！もしプレイヤーだつたら腕一本
切つてやつたのに。
でも、体術修行ならすぐ終わるだろう。
「おい、一人共先客だ。特にアキヒサお前の
よく知る奴だよ」

よく知る奴？ボブ自称エギルかな
「久しぶり！真つ黒坊や！」

真つ黒？ああキリトのことか
「よお、キリト」

「声ちつさ！もうちよい喜べよ！」
「・・・・ナイスツツコミ」

あれが壊せつて言われた岩か、随分硬そうだな

「キリト、あの石どのくらいの強度だ?」

「ざつと破壊不能オブジェクトの一歩手前かなあんたらでも骨が折れるぜ」

少し叩いてみる。二人も同じことをしている多分手触りでわかつたんだろう。

破壊不能オブジェクトの一歩手前だと。

キリトの言葉は嘘なんかじやない。

本当に硬いと。

「この岩、威力で割れるんじゃなく、数で割るとしたら、2日、それ以上かかるぜ」

とりあえず一生懸命叩きまくるんだ!

「アキヒサ、涙目で岩を叩くな」

2日間も岩を叩くだなんて僕は絶対認めない
「アキヒサが数で割ろうとしているから、俺は

威力で割れるかを実験してみる。コウタお前はどうする?」

「…………とりあえず見とく」

割れろ割れろ割れろ割れろ割れろ割れろ割れろ

「…………アキヒサが拳と気持ちをぶつけ始めた」

「あのクズ、何してるんだか」

「気になつたけど、あんたら仲間か?」

すぐに空気が変わつたことが分かつた。もちろん
ユウジが、だ。

いつものヘラヘラした感じではなく。どこからも
付け入る隙がなく、尚且つ、油断をしたらすぐに攻撃を
してやるというふうに。

まず足が動いた。踏ん張りを効かせ、腰が回り伝わつた
力で一気に拳を振り抜いた

ピシツ

僅かな亀裂と微かな音、けどきちんとした

やり方で攻撃すればすぐに碎けることがわかつた。

「ふう、感が取り戻せないな。あの感じだ

睦月中のトップを一撃で倒したときの感じだな」

何やら怖いことをブツブツつぶやくユウジ。あいつのやり方を真似たところで無理なことがわかる。そんな一撃だつた。

『素晴らしい坂元雄二くん、いやユウジ君というべきかな』

そこにはいたのは、この世界のに1万人のプレイヤーを閉じ込めた張本人でありこの世界の創造者だつた。

